金綱集の検討

――「真言宗見聞」（本・別両巻）について――

中條曉秀

一　はじめに

金綱集（古来十巻本・現行の『宗全』は十四巻本）は、身延二祖日向（一二五三～一三一四）が日蓮晩年の身延山での講義を、たとえば「浄土宗見聞」・「真言宗見聞」などと諸宗に配して記述したもので、古来から身延門流の秘書として重んぜられた有名なもので、現存の写本は身延三世日進・四世日善等によって書写され、日蓮直弟の著作としては最も大部のものである。しかし、何故に金綱集が編まれたかは一切不明である。ただ日蓮が再三にわたって『一代五時図』・『一代五時鶏図』等を図示されていることから見て、恐らく金綱集述作の縁由は、『日蓮宗事典』（六五～六六頁）も指摘するように、『一代五時図』（定遺二二九九～二三〇一頁）等に基づく釈尊一代の教説の位置づけと、各経典を依経とする各宗の位置づけを継承することにあって、それをさらに綿密にして、諸宗の主張を明瞭にすることが、その主張であったと考えられる。すなわち、『一代五時図』等が「華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃」の五時教判を中心として、それに対する各宗の配当を図示するのに対し、金綱集は各宗を柱として、その宗の依経・依論・祖師・三国相伝などについて詳述し、その特徴的教義を掲げている。要するに、金綱集は各宗の破折もさることながら、諸宗の主張の紹介に重点が置かれているところが注目される。つまりそれは、諸宗の破立の素材として金綱集が編まれたものと解すべきであろう。

次に、金綱集には日蓮遺文と共通する文がかなり散見される。たとえば『法華真言勝劣事』・『真言見聞』は金綱集の「真言宗見聞」と、『本門戒体抄』は金綱集の「小乗三宗見聞」と、それぞれ全面的に共通する。しかも、これら三遺文は日蓮の撰ではなく、金綱集を底本として作成された遺文である。その他、類似乃至部分共通のものは数多く存する。

印度學佛教學研究第三十八卷第一號　平成元年十二月

加えて、日蓮滅後の上代には金綱集と基盤を共通する典籍がかなりある。中山法華経寺三世日祐の『問答肝要抄』についていえば、十帖の中三帖存の「法相宗帖」は金綱集第八の「法相宗見聞」と、「三論宗帖」は第九の「三論宗見聞」と、「雑帖」は第十の「法華経之事」とに、それぞれ共通乃至類似の文がある。特に「雑帖」の〈注ニ進甲州ヘ法門不審ノ事〉（宗全一―三七四～三七五頁）は、日祐（一二九八～一三七四）が身延三世日進（一二五九～一三三〇）へ法門の質問事項を箇条書としたもので、金綱集の条目と共通するものが大半である。かかる事実は、当時の身延・中山両門流の交渉の一環が窺えて極めて興味深い。なお、日進と日祐の年令的な関係から考えて、日祐は日進に教示を得ていたものと思われる。

二　「真言宗見聞」（本・別両巻）の検討

金綱集には「真言宗見聞」と称するものが二本ある。すなわち、一本は宗全一三巻所収の金綱集第六「真言宗見聞」（以下本巻と称す）であり、他の一本は宗全一四巻所収の附録金綱集第六「真言宗見聞」（以下別巻と称す）である。その内容項目は、本巻が三十三の項目（ただし九項目は本巻にはなし）で、別巻は三十五の項目（ただし五項目は別巻にはなし）から成って、それぞれに台東両密批判の素材を提供している。そして、両巻の内容項目の異同についてであるが、多少の存没はあるものの大半は同である。なお、別巻について一言する。宗全の編者は「抄本ハ上総茂原藻原寺ノ所蔵ニシテ広本ハ身延所蔵ニ係ルモノナリ」（五七六頁）と記して、抄本と広本の二本を合して別巻と称している。拙稿もまたこれにしたがう。

ところで、金綱集「真言宗見聞」の両巻を通観すると、たとえば、日蓮遺文も金綱集も共に空海の十住心論・二教論・秘蔵宝鑰・心経秘鍵などの破折はするが、日蓮遺文は宝鑰の無明辺域非明分位・望後作戯論の言を謗法の中心に据えるのに対し、金綱集は十住心論の十住心の教判が大日経疏の善無畏の四句に違背する点の論証を主としている。また、日蓮遺文は積極的に空海の行跡批判を展開するが、金綱集は消極的である。これら教理・教判・行跡等々の批判については機会を改めるとして、拙稿は(a)引用経論釈の問題、(b)日蓮遺文との関連、の二点について少しく検討するものである。

(a)引用経論釈の問題について

諸宗破立の素材として金綱集が編まれたと前に述べたが、「真言宗見聞」の両巻には台東両密関係の典籍が網羅され、厖大な書冊が引用されている。今、その主たるものを挙げると、本巻からは、大日経、涅槃経、法華経、無量義経、華厳経、六波羅密経、浄名経、大集経、金剛頂経、瑜伽瑜祇経、威儀形色経、五秘密経、守護国界主陀羅尼経、大乗密厳経、

蘇悉地経、菩薩地持経（地持論）、大智度論、菩提心論、法華経の観智の儀軌、大日経疏、金剛頂経義訣、金剛界礼懺、法華玄義、法華文句、梵網経疏、玄義釈籤、止観弘決、文句記、開元録、高僧伝、続高僧伝、宋高僧伝、天竺別集（遵式ノ記）、鄙玄文、秘蔵宝鑰、法華秀句、守護国界章、大日経指帰、些々疑文（疑文略抄）、授決集、伝述一心戒文、菩提心義、真言宗教時義、大三界義、仏法伝来記、等々の典籍が、別巻からはこれらの外に新たに加えられた海龍王経、倶舎頌、妙法蓮華経憂波提舎、法界性論、五字陀羅尼、大日経義釈、四教義、法華五百問論、法華天台文句輔正記、玄賛要集、般若心経秘鍵、弁顕密二教論、蘇悉地経疏、法華論記、舎利講式、教時諍論、後唐院記、孔雀経音義序、真言小双紙、等々を引くのである。

まず(1)引用経論釈を丹念に検すると、現時点両巻共未検索なもの、たとえば『仏法伝来記』、『後唐院記』など十数点を残すが、ほぼ正確に記されていると見て良い。

(2)日蓮は涅槃経の依法不依人の遺誡により、論師人師の説よりも、経文証拠を貴ぶことは周知の通りで、かかる姿勢は金綱集にも貫かれている。その一斑を窺うものに、本巻の〈天台真言引証事〉がある。本項は金剛峰瑜祇経、解深密経、大悲経、理趣経、等々の二十二の典籍を掲げ検討し、「此等之経論ヲ引トモ法華真言ノ勝劣全所レ不レ見也」（二三八頁）との吟味態度である。さらに本巻〈菩提心論事〉・別巻〈破唯真言法中即身成仏菩提心論事〉が共に破折を加える不空訳・造の『菩提心論』について見ると、より明瞭である。すなわち、日蓮が菩提心論を最も問題としたところは、空海が十住心を立てたのは菩提心論の勝義菩提心を説く段と、『大日経』住心品とによったこと、及び「唯真言法中即身成仏」云云の一句で、日蓮はこの一句を破すために、この論は全く龍樹造に非ず、たとい龍樹造であるとしても『大智度論』の意に背くと説き、また、菩提心論が龍樹造であるとしても、この一句は訳者たる不空の曲会私情より出たものであると説く点にあった。金綱集もかかる説を踏襲し、結論として「菩提心論無レ疑偽論也」（二五二項）、「法華経ノ竜女ヵ即身成仏ハ文証現証炳焉ナリ……唯真言法中即身成仏ト不レ可レ書ト云道理顕然也……閣テ二法華経現証一於諸教中闕而不書ト云ヘル誤中誤也」（五四〇頁）と決するのである。

(3)心性蓮華について語る日蓮遺文は『日女品々供養』（定遺一五一五頁）、『日女御前御返事』（定遺一三七六頁）、『三世諸仏総勘文廃立』（定遺一六九一・一六九二・一六九六頁）、『十如是事』、『一念三千法門』、『当体蓮華事』、『十八円満抄』等々である。いうまでもなく心性蓮華説の淵源は遠くは善無畏、近くは円珍・安然に存するのであるから、この種の事項が日蓮にあっても不思議ではない。しかし、人界と仏界との相即を

説くならば、一念三千論によるのが日蓮の本来の面目であって、かかる論が存在したところで所詮枝葉末節の論であろう。さて、金綱集はというと、両巻の〈真言五智四身事〉の金胎両部の同異を説くところに、「胎界普浄月輪中有二本尊形一云云、金界帰命本覚心法身常住妙法心蓮台云云」（二五六頁）とあって、安然の主張のごとく、金剛界三摩地の心地を表示するための引文として、『蓮華三昧経』の偈頌である『本覚讃』が援引され、続けて「胎界意於二自心大日心王八分肉団一観二八葉蓮華一顕二本覚理一金界意於二自心大日心王浄菩提心一十六分菩薩十六有レ之、依レ之観二月輪十六分一証二本覚理一也云云……又云、八葉肉団観二白蓮華一者、白色是自性清浄色故寄二白色一観レ之、是八葉肉団、男向レ上女向レ下、故且女ヲハ非法器ト云也、雖レ然発二成仏心一時向レ上也、是変成男子ト云也」（二五六頁）と、金胎両部の意味を対比する中で、いわゆる八葉心性蓮華説を紹介しているのである。

(b)日蓮遺文との関連について

金綱集の「真言宗見聞」（両巻）と関連する日蓮遺文は、まず、(1)『法華真言勝劣事』と『真言見聞』の二書は、金綱集が底本であるから全面同、(2)曽って身延山に存した『祈禱抄』〈承久調伏事〉（定遺六八一～六八三頁）は本巻〈真言祈禱事〉（二七二～二七四頁）・別巻〈承久祈禱事〉（五四六頁）と同、同じく身延曽存の『聖密房御書』（定遺八二二～八二四頁）は別巻〈顕密事〉の「御勘文云」（五四二頁）以下の文と同、また、五大部に数えられる撰時・報恩の両抄と行学日朝の写本の『真言七重勝劣』は、短文の数項及び図が同、(3)後述するが図録の『日本真言宗事』は六典籍の引文が同、そして、真偽に問題の存する『真言宗私見聞』はその約半分が同、等々である。

――日本真言宗事――

定遺三巻図録所収の『日本真言宗事』の係年は文応元年、正に抄録で日蓮の語はない。その内容は、まず空海以来の東密列祖の系譜を図し、次に『仏法伝来記』・『孔雀経音義序』・『弘法大師伝』を引いて、空海の即身成仏・高野入定の由来を示し、さらに『秘蔵宝鑰』を引き、謗人謗法は堕地獄とする空海の言を明かすもので、空海讃仰のためではなく、空海の誑惑を示すにあることは勿論である。

そして、この『日本真言宗事』は金綱集別巻〈東寺天台所立経文釈要文〉と共通の文が六点ある。逐一の対照は紙幅の都合で出来ぬが、大雑把に図示すると表(I)のようになる。

すなわち、『日本真言宗事』が引く十点の引用経論釈中六点が同じであるということである。唯この一事を以て云云するには聊か忸怩たるものがあるが、誤解を恐れず一歩踏み込んでいえば、かかる金綱集別巻の一連の文が、『日本真言宗事』の原型となったと見られなくもない。如何であろうか。

表(I)

『日本真言宗事』

仏法伝来記(一巻信救作)　弘法大師帰朝之後欲レ立二真言宗一。諸宗群二集朝庭一。疑二即身成仏義一。大師結二智拳印一向二南方一。面門俄開成二金色毗盧遮那一。即便還二帰本体一。入我我入争即身頓証之疑　此日釈然。真言瑜伽宗　秘密曼荼羅道　従二是時一而建立文。　(定遺二二九七頁)

孔雀経音義序此時諸宗学徒帰二大師一。始信二真言一。請益習学。

三論道昌・法相源仁・華厳道雄・天台円澄等皆其類也(孔雀経音義真済記也)。

(定遺二二九七～二二九八頁)

金剛頂経疏云(慈覚釈)　……(略)……(定遺二二九八頁)

教時義四云(安然釈。破弘法一文也)　……(略)……(定遺二二九八頁)

秘蔵寶鑰中云　……(略)……(定遺二二九八頁)

不空三蔵要決云　……(略)……(定遺二二九九頁)

(注)『日本真言宗事』と『金綱集』とは六点の引用経論釈が同。

特に『仏法伝来記』と『孔雀経音義序』の二書が注目される。なぜならこの二書は不現存にもかかわらず、同文が「孔雀経音義云」と銘打って『報恩抄』(定遺一二三二頁)に引かれているからである。とすると、一一の吟味は控えるが、これらには何らかの脈絡が存するのであろうか。それとも宗門上代には、この種の書物が存していたものであろうか。

金綱集(宗全一四巻)

仏法伝来記云(一巻信救作真言宗宗論事)　弘法大師帰朝之後欲レ立二真言宗一、諸宗群二集朝庭一矣、疑二即身成仏之義一、大師結二智拳印一向二南方一、面門俄開成二金色毘盧遮那、即便還帰本体一、入我我入事、即身頓証之疑、此日釈然、真言瑜伽宗秘密曼荼羅道、従二彼時一而建立矣、　(五二四頁)

孔雀経音義序此時諸宗学徒帰二大師一、始信二真言一、請益習学、三論道昌、法相源仁、華厳道雄、天台円澄等皆其類也、(孔雀経音義真済記也)

(五二四頁)

金剛頂経疏云(七巻書慈覚作)　……(略)……(五二一頁)

教時義第四云(四巻書安然釈)　……(略)……(五一七～五一八頁)

秘蔵寶鑰中云(弘法大師作三巻)　……(略)……(五一九頁)

真言義決云(不空訳)　……(略)……(五二三頁)

――真言宗私見聞――

定遺続篇所収の『真言宗私見聞』は文永九年に係けられ、佐渡での著といわれているが、日蓮の撰ではない。その構成は、一教主同異事、二諸仏道同事、三真言説処事、四一仏他仏事、五教主勝劣事、六顕密勝劣事、七祈祷事、八即身成仏事、九方等部事、一〇真言亡国事、一一謗法事、一二背自宗

経師事、一三貴人背法事、一四理同事勝事、一五弘法事、の十五条から成っている。そして、『日蓮聖人遺文辞典』（五八五頁）によれば、「四・六・八・九・一一・一四の六条は日向『金綱集』巻六とほとんど同文である」との記述である。よって、定遺は金綱集との同異をその脚注に示している。勿論文中の金綱集とは本巻の金綱集を指す。ところが、金綱集の文章上の問題として委細に検討を加えると、一点（疑文略抄の二十七字・円珍の些々疑文のこと）例外があるものの、どうやらこの場合の金綱集とは本巻ではなく、別巻の金綱集を指しているように思われてならない。なぜならその典型例の一斑として、表(Ⅱ)のごとく「九方等部事」を以て示すものとする。

表(Ⅱ)

『真言宗私見聞』
（定遺二〇八五～二〇八六頁）

今案三摩地門唯在二秘密一。自除一切修多羅中闕而不レ書。故云二大乗中王秘中最秘。法華尚不レ及。況自除の経乎。判置二第三時一譬如下指レ日為レ螢以レ海為レ滴等。他云大唐廣修・維鐲判二大日経等一雖レ属二方等部一本朝先徳円珍既再往談レ之法華尚不レ及況自除教乎と。何背二祖師所判一真言劣法華勝云剰堕獄の邪法と云べきや。自云漢家・日域両国の先徳既及二異義一。用レ彼捨レ此是レ一非レ一進退難治也。都不レ可レ背二祖師一云廣修・維鐲不レ可レ背。不レ背真言方等部の接なるが故方便の説劣二法華一事勿論也。勝劣二義相違落居時背二一方一事無レ疑。若不レ依二経文一者用捨有レ私。依法不依人金言是也。其上此指帰智証釈云事不審難レ極。其故授決集若望法華・（以下略）

金綱集・本巻
（宗全一三巻二六一～二六二頁）

今案三摩地門唯在二秘密一、自除一切修多羅中闕而不レ書、故云二大乗中王秘中最秘一、法華尚不レ及、況自除教乎、判置二第三時一、譬如下指二日光一為レ螢以レ海為レ滴上云云、

（欠落の部分）
（宗全一三巻二二三頁）

其故ハ授決集云、若望法華、（以下略）

金綱集・別巻
（宗全一四巻五四〇～五四一頁）

今案三摩地門唯在二秘密一、自除一切修多羅中闕而不レ書、故云二大乗中王秘一中最秘、法華尚不レ及、況自除教乎、判置二第三時一、譬如下指二日光一為レ螢以レ海為レ滴上云云、問大唐廣修惟鐲判二大日経等一雖レ摂二方等部一、本朝先徳円珍既再往翻レ之法華尚不及況自除教乎ト云ヘリ、何背二祖師所判一真言劣法華勝ト、剰ヘ堕獄ノ邪法ト可レ云乎、答漢家日域両国先徳既以異義、用レ彼捨レ此是レ一非レ一進退難治也、都不レ可レ背二祖師一云ハ廣修惟鐲ヲモ不可レ背、不レ背者真言ハ方等部摂方便、法華ニ劣レル事勿論也、勝劣義両師相違落居ノ時ハ背二一方一事無レ疑、若不レ依二経文一者用捨有レ私、依法不依人金言是也、其上此指帰智証ノ釈ト云事不審難レ極、其故授決集云、若望法華（以下略）

（注）(1)――部分が共通するところで、……継続の意が示されよう。
(2)『遺文辞典』指摘の六条もこれにしたがっている。

すなわち、金綱集本巻の欠落の文は別巻によって満たされ、その満たされた文は『真言宗私見聞』と同、という図式が成り立つ。つまり『真言宗私見聞』は、否『真言宗私見聞』の作者は、金綱集別巻を念頭に置いたであろう筆致である。極めて興味深い。しかも、「一五弘法事」は別巻〈弘法大師事〉と全同である。とすると、前述の『日蓮聖人遺文辞典』の記事をより正確に表記するとするならば、「『真言宗私見聞』は十五条から成るが、四・六・八・九・一一・一四・一五の七条は、金綱集別巻とほぼ同文である」とするのが適当となろう。

三　むすび

如上の検討を踏まえ、興味ある数項を列挙してむすびとする。

（1）日蓮の涅槃経の依法不依人の遺誡により、論師人師の説よりも経文証拠を貴ぶという宗風は、脈々と金綱集にも引き継がれている。

（2）金綱集は『本覚讃』を引いて心性蓮華説を紹介している。案の定、日蓮は既にこれらの法門を知悉されておられ、身延山においても弟子達にかかる講義をなされていたものと思われる。

（3）金綱集「真言宗私見聞」（本・別両巻）と『日本真言宗事』・『真言宗私見聞』との対照を試みるにおいて痛感することは、金綱集別巻の位置とでもいうべきものを改めて問い直す必要があろう。

なお1紙幅の都合で注は省略する。
2『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、とそれぞれ略称した。
3原本未見である。拙稿は宗全本によった。
4平成元年度文部省科学研究費補助金一般研究(C)「金綱集の研究」の研究成果の一部である。

〈キーワード〉金綱集、日本真言宗事、真言宗私見聞

（身延山短期大学教授）

新刊紹介

塚本　啓祥　松長　有慶　磯田　熙文　著

『梵語仏典の研究Ⅳ　密教経典篇』

B五判・五七〇頁・一九、〇〇〇円

平楽寺書店・一九八九年二月二十五日刊